

37' tshe は漢字「茶」*tsai* (GSR, 593-y) の対音で、意味は *zan skal* 「齋食」である (n.609)。

38' khirms bu chun は *la loi bu-chun* ではなく、*bu* は *khirms* のついた縮小辞で、*khirms bu* 「条例」を意味する (n.609, p.380)。

(Ariane Macdonald: *Une lecture des Pelliot Tibétain* 1286, 1287, 1038, 1047, et 1290. *Études Tibétaines*, Paris, 1971.)

T・R・トラウトマン著

## カウテイリヤと『アルタシャーストラ』

——作者とテキスト発達に関する

統計学的研究——

山崎 元 一

シャマシャストリによつて古代インドの政治論書『アルタシャーストラ(実利論)』の存在が学界に紹介されてから、すでに六十六年が経過した。この間、同氏による本論書の校訂本(一九〇九年)、英訳本(一九一五年)をはじめ、新たに発見された諸写本を参照した校訂本や、日本語訳(中野義照訳)を含む数国語訳が出版されてきた。インドの古文獻としては

特異な内容をもつた同書が、古代インドの解明に貢献したところは大きい。しかし、遺憾なことに、同論書の作者と成立年代について研究者の間に見解の一致がみられず、この両問題が今日なお重要な研究課題として残されている。ここに紹介する研究書の著者 T・R・トラウトマンは、新進のアメリカ人学者で、ウイスコンシン大学を卒業したのちロンドン大学のオリエントリアリカ学院に学び、A・L・バシヤム教授の指導のもとに博士論文の作成に従事した。本書はその成果である。本書の構成は次のようになっている。

### 著者序文

序文 (A・L・バシヤム)

第一章 カウテイリヤと『アルタシャーストラ』

第二章 『チャーナキヤハチャンドラグプタハカター』

第三章 『アルタシャーストラ』と作者問題に関する統計学的方法

第四章 判別用の諸単語

第五章 センテンスの長さとの複合語の長さ

第六章 『アルタシャーストラ』、パールチ、メーダーティ

ティ

第七章 『アルタシャーストラ』の成立年代

付録 統計表

## 文献紹介

## 索引

以下に、各章の内容を逐次紹介してゆきたい。

第一章で著者は、まず『アルタシャーストラ』研究史を原作者と成立年代の問題に焦点を当てつつ概観し、研究者間の不一致は大きいが、本論書を唯一の作者の手になる単一性をもつた作品とみる点では大部分の学者の意見が一致することを論ずる。続いて、従来の文献考証的研究が行詰り状態にあることを指摘し、その打開のためには新たな視角と方法が必要であると強調している。著者にとつて新たな視角とは、通説化している唯一の作者の仮定を疑つてかかることであり、新たな方法とは、文体的統計学的分析の試みである。

第二章は、『アルタシャーストラ』の著者と伝えられるカウティリヤ(チャーナキヤ)にまつわる伝説の比較研究にあてられている。チャーナキヤは、ナンダ朝に恨みを抱くバラモンで、マウリヤ朝の始祖チャンドラグプタを援けてナンダ朝を倒した権謀術数家として知られる。著者はまず、一群の物語の集成で、民間に流布した『チャーナキヤリチャンドラグプタリカター(物語)』が存在したことを仮定する。そして現存諸伝承を、

(1) パーリ語文献(特に *Mahāvamsa Tika* 所収のもの)

(2) ジャイナ教文献(主としてナーマチャンドラの *Purīsi-sāparvan* 所収のもの)

(3) カシ米尔系伝承(ソークレーヴァの *Kaṭhasarīsāgara*

とクシエーメンドラの *Bṛhatkahamañjarī* 所収のもの)

(4) ヴィシャーカーカッタの *Mahārāṣṭrasa* とその関係文献の四系統に分類し、各伝承間の共通事項を抜き出すなどして『カター』の原型を推測する。本来不合理の内容をもつた物語のいずれが古形であるかを判断するのに、内容的にどちらが合理的であるかを基準にするなど(pp. 25-27)、唯一の原型を再構成することからくる無理が一部に感じられるが、考証は全体的に慎重になされ、結論も穩当な線に落着いている。

なお、この章の後半では、西洋古典に伝えられるアレクサンダーのインド遠征に関する諸問題が再検討され、さらに『チャーナキヤリチャンドラグプタリカター』の断片が、変化し他のインド伝承と混同した形で、西方世界に伝えられた過程を推測している(チャーナキヤの名は、この過程で脱落し、彼にまつわる挿話のいくつかは、新王朝の創始者として西方世界に知られたチャンドラグプタに帰せられたのであるという)。そして最後に、同カターは史実を根底とし、さまざまな誇張・改変の手を加えられて成立したものであることを述べ、この伝承から史実を抽出することが困難であること

を認めつつ、チャーナキヤを歴史上の人物とみてよからうと結論している。インド古代の研究には、伝説と史実の混乱がしばしば認められるのであるが、著者はこの点かなり慎重であり、多くをカターの問題として処理し、史実との関係を論ずるのは最小限にとどめている。

第三章以下の三章では、前章の文献学的研究とはうつつ変わり、統計学的分析方法を駆使した新しい研究の成果が示されている。著者の言うところに従えば、この方法は、すでに西洋古典の研究でかなりの成果をあげているらしい。インドに関しては、この方法を用いて *Mahabharata* の一部を研究したものが発表されているが、本研究のようにコンピュータを用い、大規模になされたのは初めてである。評者自身は統計学に全く暗く、本書に示された数式や統計表を十分に理解する能力をもたないのであるが、理解できた範囲内で、研究方法とその結果について紹介してみたい。

第三章では、『アルタシャーストラ』(全十五巻)の内容、記述形式、構成が簡単に述べられたあと、原作者問題に関する統計学的分析の方法論が示され、続いてその方法論を用いた予備的研究がなされる。

著者はまず『アルタシャーストラ』の内容に基づいて書かれた *Nisista* 形式を模倣して書かれた *Kamsastra* という両書について、その構成を検討したあと、改めて『アルタ

シャーストラ』の構成の不規則性に注目する。そして同書の(1)章 (*adhya*) による区分、(2)各章末尾の韻文、(3)第一章全体、(4)第十五巻全体は、この書を現在の形にまとめた編者が、既存の諸論書を整理・再編集した際に付加したものであると推論する。そして、本論書冒頭の文

「大地の獲得と保護の為に、古代の学匠に依つて編述せられた殆ど大部分の実利論 (*arthasra*) の綱要として (*samhita*)、此の実利論は作成せられたのである。」(中野義照訳)

の “*samhita*” は、先学の諸論書に基づきつつ自己の文体で新たに作品を書き上げたという意味ではなく、学匠たちの諸論書を寄せ集めて (*brought together*)、あるいは圧縮して (*condensed*) 一つの包括的な作品にまとめあげたことを意味すると考える。つまり著者は、本論書には編者(カウチイリヤと自称することによつて本論書を権威づけている)を含む数人の政治論者の文章が、それぞれの文体上の個性を保つたまま伝えられているとみて、通説となっている本論書の一貫性に疑いの目を向けるのである。著者の統計学的研究はここを出発点としている。

次に著者は、試験的に第二、第七、第九の三巻を選び、そこにみられる用語分布 (*word-distribution*) の分析を行なっている。この分析の判別用単語 (*discriminator*) として採用

されたのは *ca* (and), *va* (or) という二箇の不変化詞であるが、これは、このような「全く俗的な、頻度の高い機能語 (utterly mundane high-frequency function words)」<sup>1)</sup>が、主題に左右されることが少なく一人の作者によつて平均して用いられることが、従来の研究の結果明らかにされているからである。統つて三〇〇センチテンス (*danda*) で区切られた句) からなるサンプルを第一巻から二組 (2-I, 2-II)、第七巻、第九巻からそれぞれ一組 (7, 9) つくり、サンプル内における *ca*, *va* の分布を表示する (表参照。表中の 2-I のサンプルは、*ca* を含まないセンチテンスが二〇九、*va* を一つ含むものが八一……を示す)。そして、判別用単語の分布の型

<i>ca</i> Occurrences	Sample			
	2-I	2-II	7	9
0	209	200	253	246
1	81	90	32	41
2	9	9	12	9
3	1	1	3	4

  

<i>va</i> Occurrences	Sample			
	2-I	2-II	7	9
0	258	237	192	214
1	36	54	74	61
2	2	8	19	15
3	2	1	7	4
4	2	—	3	2
5	—	—	2	1
6	—	—	1	—
7	—	—	—	1
8	—	—	—	—
9	—	—	—	1
10	—	—	—	—
11	—	—	—	—
12	—	—	1	—

が  $\langle \text{2-I} \rangle$  と  $\langle \text{7,9} \rangle$  のグループに分かれることを指摘し、さらにグループ間の親密度の差を明確にするため、有意性テスト (significance test) として利用度の高いカイ二乗テスト (chi-square test) を試みている。そして、両グループの間には大きな不一致が存在し、それぞれ異つた作者によつて書かれたものであらうと結論している。

ここまで読んでまず感じた素朴な疑問は、同一作者の示す判別用単語の偏差 (それを越えれば異作者の存在を認めねばならないような範囲) を設定する基準についてである。著者はこの問題に関して一応の統計学的説明を加えてはいるが (pp. 84-85)、われわれを十分には納得させてくれない。サンプルを抽出した各巻についてみれば、第二巻が行政官の行動を法規の形式で列挙したものであるのに対し、第七巻は対外関係の基本となる六計の適用を、第九巻は遠征の際の行動を、それぞれあらゆる局面を想定しつつ論じたものであり、前者に *ca* が多く、後者のグループに *va* が多いのは当然である。同一作者が主題に従つて記述の仕方を変えることはありうろと思われる。著者は内容を無視して数字だけで処理しているが、それでよいのであらうか。統計学的数式を用いて算出した数値の意味するところを十分には理解できない評者にとつて、できることは各巻の主題や記述方法を考慮にいれ、単純な表を見ることから得られる直感的判断であるが、その

判断からすれば、必ずしも異作者の存在を証明できたとは思われないのである。

第四章で著者は、まず、より多くの有効な判別用単語を利用し、右のような疑問に答えようと努めている。有効な判別用単語とは、頻度が高く、同一作者の作品で平均的に分布し、異作者間で異った分布を示すような不変化詞である。それを求めるため、Sh. Pathak と S. Chitrao が作成した *Mahabhasya* の完全な用語索引が利用され、また対照資料 (control material) として、作者の明らかな作品、すなわち、(1)韻文の作品三篇——カルハナの *Rajatarangini* とジョーナラージャによるその続編、ソーマーシュヴァラ作と伝えられる *Manusollasa*、(2)散文の作品二篇——ソーマデーヴァ＝スーリの *Nirvakyamrita*、ガンデーシャの *Tattvacintamani* を用いる。そして、各作品の各サンプルに対しカイ二乗テストを行なうのであるが、その過程で散文の全サンプルをコンピュータの力を借りて二十語の組 (20-word block) に再編成するなど(センテンス単位より有効であることが判明したため)、煩瑣な作業を行なっている。このようにして得られた結果は、*va* が最良の判別用単語であり、それに *evam* (thus), *atra* (there), *va, eva* (indeed) が続くというものである。

このような作業を経たのちに、右の五不変化詞を用いて

『アルタシャーストラ』の統計学的研究がなされる。しかし、全部の巻の分析に入る前に、まず長文の巻である第二、第三、第七の各巻について、それぞれ四、二、二箇のサンプル (20-word block よりなる) を抽出し、それらについてさまざまなカイ二乗テストがなされる。複雑な手順は省略して、その結果だけを示す次のようになる。(1)第二、第三、第七の各巻内の文体はいずれも同質的であり、各巻はそれぞれ一人の作者によつて書かれたものである。各巻は相互に大きな文体上の差を示しており、それぞれ異った作者の手で書かれたものである。

続いて、右の三巻のそれぞれと残りの十一巻(第十五巻は除く)との間の親縁関係が調べられる。その結果、『アルタシャーストラ』の各巻は、親縁関係をもつた(おそらく同一作者によつて書かれた)次の四グループに分けられることになった。(1)一―二―八の三巻(しかし、第八巻は他の両巻から離されており、また主題も叙述方法も大きく異なるため、他の両巻と同一作者の手になるかは疑問であるという)。(2)三―四―一五の三巻。(3)六―七―九―十の四巻(ただし第六・第十の両巻は客観的結論を得るためには短かすぎる。また第六巻は、以下の巻の導入部分であり、『アルタシャーストラ』の最終編者が書き加えた可能性もあるとみる)。(4)十一―十二―十三―十四の四巻。

第五章では、右の結論を傍証するため、センテンスの長さ  
と複合語の長さに関する統計学的調査がなされる。センテ  
ンスの調査はヨーロッパ古典の研究でかなり有効であることが  
わかつており、またサンسكريット語の特徴である複合語の  
調査は、著者判別に有効と考えられたからである。まずソー  
マデーヴァとガンデーシャの作品について予備的調査がなさ  
れるが、センテンスの基準がはつきりしないことや、非常に  
長い複合語が偶発性をもつて現われることもあつて、思わし  
い結果は得られていない。著者は、これら両テストには現段  
階ではまだ改良の余地があることを認めつつ、『アルタシャ  
ーストラ』の分析に入つてゆく。分析の順序は第四章と同じ  
で、まず第二、第三、第七の三巻についてカイ二乗テストを  
行ない、次にこれら三巻と残つた巻のそれぞれとの間の親縁  
関係が求められる。しかし、得られた結果は、第四章におけ  
る判別用単語の分布調査の結果(四グループの存在)を積極  
的に裏付けるものとなつていないように思われる。

第六章では、再び伝統的な文献批判の方法を用いた研究が  
なされている。一九六五年に D. Schlinglof は、『メーダー  
ティティの『マヌ法典』注釈 (*Manubhasya*) と『アルタシ  
ャーストラ』との間にみられる十九箇所に対応句を比較し、  
前書は後書を直接参照して書かれたのではなく、後書の作者  
が資料として用いたのと同じ諸政治論書 (*arthasāstra-sou-*

ら)を参照していると論じた。Schlinglof は、注釈家は一  
般に他文献から逐語的引用をなすか、少なくとも原典の意味  
を変えることをしないという前提に立ち、両文献中の対応句  
には相違が大きすぎることから右の結論を出したのである  
が、著者トラウトマンは、この前提に疑問をはさむ。そし  
て、新たに発見されたパールチ Bharuci の『マヌ法典』注  
釈 (*Manusāstravivaraṇa*) を加えた三文献中の二十一の対  
応句(このうち六つは *Arthasāstra-Medhātithi* のみに共  
通)の原文を対照表に示して検討し、パールチが『アルタシ  
ャーストラ』を参照したこと、メーダーティティが『アルタシ  
ャーストラ』を直接知つていた可能性は少なく、主としてパ  
ールチによる引用を参照したこと、などを論じている。また  
メーダーティティが他の政治論書を知つていたことも確かだ  
るとし、その中には彼が二回引用する *Adhyakṣapratna*  
のように『アルタシャーストラ』の編者の資料となつたもの  
もあつたことを推測している (*Adhyakṣapratna* は『アル  
タシャーストラ』第一巻と同タイトルであり、著者はこれ  
を、諸論書の合成により同論書が成立したことを示す証拠の  
一つと考えている)。

第七章の前半においては、『アルタシャーストラ』編集の  
過程を知るために、同じ過程を経て編まれたと思われるヴァ  
ーチャヤナの *Kamasthra* を対象に、予備的研究がなされ

る。そして四つの判別用単語（前記五単語から *swan* を除いたもの）を用いてカイ二乗テストを行ない、同書が(1)第二巻、(2)第六巻、(3)第七巻、(4)第一・第三・第四・第五巻の四系統に分類できることを明らかにし、その結果を複合語の長さに関するテストで確かめる（複合語のテストは、必ずしも思わしい結果が出たとはいえない）。著者の結論は次のようなものである。(1)第一・第三・第四・第五の四巻は唯一の作者の手になる。おそらくヴァーツァーヤナ自身が先人の書物を資料として用い、それを自己の文体で要約したものである。(2)第二巻、第六巻、第七巻は、それぞれ別人の文である。すなわち、ヴァーツァーヤナは、本書を編集する際に、これら三巻については原形をあまり変えることなく編入した（ただし第七巻は短いため、速断できないとする）。

著者は、『アルタシャーストラ』もこれと同じ経過をとって編まれたと主張する。すなわち、編者は学匠たちの作品を合成して一冊の本にまとめる際に、各作品の文体の特徴がわからなくなるほど手を加えることはせず、それらを寄せ集めて章分けし、章の終りに韻文を添え、さらに第一巻第一章と第十五巻を加えたと考えるのである。従つて、現存『アルタシャーストラ』は、少なくとも四人の作者によつて書かれたものということになる。（著者は、結論部分で、同書が三、四人の手によつて成つたものであるとするが（p. 186）、これ

は、少なくとも四人と訂正されるべきであろう。著者は第四章で、『アルタシャーストラ』を構成する四グループはそれぞれ別人の手になると主張しており、それに編者が加われば五人となる。もし編者が四グループのうちの一つをも書いたとすれば、四人になるのであるが、複合語テストの結果は第四グループのうち第十一・第十二章と第十三・第十四章が別人の手になるらしいことを示しており（p. 187）、また著者自身も認めている通り、別人の作品が似通つた用語分布を示すことはありうるのであるから、同書に加わつた作者の手は、さらに増す可能性がある）。

本章の後半では、『アルタシャーストラ』の成立年代が論じられている。著者の立場からすれば成立年代は唯一ではありえず、原則的には、同書から判別できる作者の数と同数の成立年代が論じられねばならぬことになる。マウリヤ朝の宰相カウティリヤの手が加わっているかどうか、加わっているとすればどの部分か、という問題については、統計学的研究は何ら解決を与えてくれない。また成立年代の推定にも統計学は無効で、結局、従来と同じ文献考証的方法に頼ることになる。

著者はまず、現存『アルタシャーストラ』の知識をもつて書かれた諸文献の成立年代を調べ、現存形の成立の下限を仮に西暦二五〇年ごろに求める。続いて、同書第一巻中の年代

推定の手掛りとなる記事(王勅におけるサンクリット語の使用、打刻印貨幣の存在、いくつかの地名)を検討して、第二巻の成立(すなわち、第一・第二・第八巻の成立)を二世紀中ごろと推定している。次に第三・第四巻に関しては、『ヤージュニャヴァルキヤ法典』以前で、かつヒンドゥー法典の全体的発達以前(『マヌ法典』以前の意味か?)と考え、第七巻のグループについては、高度に複雑化した内容からあまり早い時期の成立ではなからうと述べている。成立年代を各巻ごとに推測するというアイデアはおもしろいが、残念ながら第二巻のグループを除いては、曖昧なままになっている。

以上の紹介から明らかのように、本書はきわめて意欲的な労作であり、統計学的分析の対象は『アルタシャストラ』のみにとどまらず、数篇の古典に及んでいる。そして分析の結果得られた結論は、これまでの『アルタシャストラ』研究の常識を越えたユニークかつ示唆に富んだものである。本書が、インド古典研究の新しい方法を提示した重要な成果を収めたものであることは言うまでもない。しかし、第三章を読んだときに感じた疑問は、本書を読み終つたあとにおいてもなお除かれていない。書中に示された統計学の数式や表を理解するにあつて、国学院大学経済学部の山田喜志夫教授

の御指導をうけたが、氏の御教示によると、人文科学・社会科学の分野におけるこうした統計学的処理の有効性については、統計学者の間でも今日なお意見が分かれているという。インド古典の統計学的研究は端緒にいたばかりであり、方法の上でもまだ改良の余地が多いようである。われわれの疑問を晴らし分析の結果にいつそう客観性を与えるためには、こうした研究の積重ねがなによりも必要であろう。

(T.R. Trautmann: *Kautilya and the Arthashastra, a statistical investigation of the authorship and evolution of the text*, Leiden, 1971. (xviii+227p.))

市古宙三著

## 近代中国の政治と社会

藤 田 正 典

(1)

本書は第一部 太平天国、第二部 洋務と変法、第三部 義和団、第四部 辛亥革命、付論 近代中国研究の手びき、英文論文 の六部から構成されている。そうして第一部は研究論文五篇、概説一篇、学界展望一篇、第二部は研究論文三篇、概説二篇、第三部は研究論文一篇、概説一篇、第四部は